



# 健康かわらばん

## 第97号 (令和4年2月号)

### 特集：漢方薬の基礎知識

#### 1. 漢方薬とは

植物の葉・根・茎・皮や鉱石等のうち、薬効のあるものを精製したものを生薬（しょうやく）といいます。漢方薬は古来からの経験に基づき、複数の生薬を組み合わせられて作られています。漢方薬は体の偏った状態を元の調和のとれた状態に戻し、自然治癒力を高めることにより、病気や症状を改善することを重視しています。

#### 2. 漢方薬の歴史

漢方医学は中国由来の伝統医学ですが、江戸時代に日本独自の発展を遂げました。明治に入り、西洋医学重視になり急激に衰退しましたが、戦後になり西洋医学にも限界があることから漢方薬が見直されるようになりました。1976年に漢方エキス製剤が薬価基準に収載され、保険医療の適応になりました。現在、医療用の生薬は200種類を超え、漢方製剤は148品目が承認されています。

#### 代表的な生薬（抜粋）



甘草(カンゾウ)  
マメ科カンゾウの根：健胃・免疫力増強・抗炎症・抗アレルギー・諸薬の調和



当帰(当帰)  
セリ科トウモロコシの根：冷え性・貧血・血行障害・抗炎症・抗アレルギー



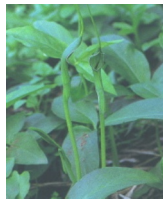
桂皮(ケヒ)  
クスノキ科ケヒの樹皮(シナモン)：発汗・解熱・鎮痛・健胃・精神安定



人参(ニンジン)  
ウコギ科オオニンジン(朝鮮人参)の根：抗疲労・抗ストレス・免疫力増強



柴胡(サイコ)  
セリ科シマサイコの根：抗炎症(慢性炎症)・免疫調節・意欲亢進



半夏(ハンゲ)  
サトウキビ科カラシナの塊茎：鎮咳・去痰・抗嘔吐・精神安定



芍薬(シャクヤク)  
ポピー科シャクヤクの根：筋肉のケイレンをとる・婦人科疾患



茯苓(フクリョウ)  
サルノコシカケ科マツホトの菌核：利水・抗ストレス・抗炎症・抗嘔吐



大黃(ダイオウ)  
タデ科ダイオウの根：下剤・胃腸の炎症をとる・婦人科疾患



麻黄(マオウ)  
マオウ科シマオウの地上茎：発汗・解熱・鎮咳・抗炎症・利水

#### 身近な生薬



生姜(ショウガ)



杏仁(コウニン)



蘇葉(ソウエツ)



大棗(ダイソウ)



陳皮(チンヒ)



桃仁(トウニン)

生姜(ショウガ)は発汗・去寒、杏仁(アズノ種)は鎮咳・去痰、蘇葉(ソウエツ)は精神安定・発汗、大棗(ナツメの実)は健胃・精神安定、陳皮(ミカンの皮)は健胃・鎮咳、桃仁(桃の種)は婦人科疾患に有効です。米・小麦・ハッカ・サシヨウ・カガイロ・水飴・ハトムギ等も生薬に含まれます。

#### 3. 西洋薬との比較

漢方薬は元々複数の有効成分を含む生薬をさらに複数組み合わせた合剤の合剤であり、単一成分を合成した西洋薬とは成り立ちが違います。一つの生薬単独ではなく複数の生薬を組み合わせることにより、相乗的に有効な作用を生み出し、有害作用を減らしています。西洋薬では一つの病気・症状に対する薬が誰に対しても画一的に投与されるのに対し、漢方薬では個人個人の体質・病態が重視されるため、同じ病気を別の薬で治療したり(同病異治)、同じ薬が全く関連のないような病気にも使われます(異病同治)。



#### 4. 漢方医学の考え方（抜粋）

##### A. 証（虚実と陰陽）

体力が充実し抵抗力のある状態を実証、虚弱で抵抗力の乏しい状態を虚証と言います。熱や炎症があり新陳代謝が強すぎる状態を陽証と言い、冷えが有り新陳代謝が落ちている状態を陰証と言います。これらの虚実・陰陽で使用する漢方製剤が異なってきます。

##### B. 気・血・水

気とは活力・パワーのことで、気の足りない状態を「気虚」、気のめぐりが悪く詰まっている状態を「気滞」、気が下から突き上がっている状態を「気逆」と言います。血とは血液や栄養分のことで、血が滞っている状態を「瘀血」（おけつ）、血の足りない状態を「血虚」と言います。水とは血液以外の体液のことで、水の分布が偏っている状態を「水毒」（水滞）と言います。それぞれに有効な生薬が含まれる製剤が選ばれます。

#### 漢方医学の「証」



気血水	主要徴候	有効生薬(抜粋)
気虚 (きぎょ)	元気がない・食欲不振 疲れやすい	人参(ニンジン) 黄耆(オウギ)
気滞 (ぎたい)	意欲が出ない のどが詰まる	半夏(ハンゲ) 蘇葉(ソウ)
気逆 (きぎゃく)	のぼせ(冷え) 動悸・発汗・不安	桂皮(ケイ) 黄連(オウレン)
血虚 (けっきょ)	皮膚のかさつき・脱毛 貧血・冷え・集中力低下	当归(トウキ) 地黄(ジオウ)
瘀血 (おけつ)	生理不順・生理痛 色素沈着・痔	桃仁(トウニン) 大黄(ダイオウ)
水毒 (すいどく)	むくみ・めまい・耳鳴り 嘔吐・頭重感	茯苓(フクヨウ) 防己(ホウイ)

虚実・陰陽・気血水だけでなく、六病位（病気のステージ）、五臓（肝・心・脾・肺・腎）、表裏（体表側か内臓側か）等の漢方理論があり、漢方専門医の処方選択の基準になります。

#### 漢方薬が有効な症状



#### 5. 漢方医学の診察法

四診と言います。望診・聞診・問診・切診により行います。望診は患者さんの全体の様子・体格や舌を観察すること、聞診とは嗅覚・聴覚を使って診断すること、問診は患者さんの訴えを聞くこと、切診とは脈や腹部を触れて診断することを言います。

#### 6. 漢方向きの症状

更年期障害に代表される冷え・ほてり・発汗・動悸等の自律神経症状、生理痛、冷え性、天候・気圧に関連した症状（頭重感・めまい・夏まけなど）、検査で異常がない機能的な病気（神経性食道狭窄症など）、老化や過労・体力減退に伴う体の不具合、こむらがえり、しゃっくりに関しては漢方薬の方が有効なことが多く、アレルギー・免疫異常・各種の痛みにも有効なことがあります。西洋薬と併用することで効果が増すことも多々あります。

本と生薬までとし、製剤の話は今後に掲載致し



今月号は趣向を変えて、四五号以来の漢方特集に致しました。漢方治療ではその人の体質を非常に重視し、病名や症状だけでなく、証に合う製剤を選択しなければならぬところが非常に難しいところだと思います。漢方の大家でも一度の処方では効果が乏しく、数回処方を変え、回数も多々あります。逆に本人の証に漢方薬がピッタリはまったときには、同時に色々な症状が改善することがあり、西洋薬では得られない効果です。現在問題になっていない、漢方薬が有効な可能性が有ります。漢方薬は作用が穏やかで効き目が出るまでに時間がかかります。間がかかると思われていますが、西洋薬以上に即効性があり、急性疾患に使われる薬もあります。今回は基本的に本と生薬までとし、製剤の話は今後に掲載致し

あとがき